

助成年度：2019 年度

[所属] 京都大学 フィールド科学教育研究センター

[役職] 教授

[氏名] 徳地 直子

[課題]

森里連環学に基づく豊かな森と里の再生：「芦生の森」における研究者と地域との協働に基づく学際実践研究

[内容]

日本各地の農山村では、過疎化・高齢化という「里の衰退」が進行している。一方、日本各地で「森の衰退」も進行している。森の衰退と里の衰退は密接につながっているにも関わらず、これらの課題に向けた研究は、各々異なる研究視点で研究され、学際的で総合的な課題解決に向けた研究は十分ではなく、抜本的に課題を解決できていない。本プロジェクトは、森と里の連環学に基づき、従来個別に考えられてきた森と里の課題をつなぎ、相乗的な再生策を実践的に提唱することを目指した。

まず、森の再生を中心とした、ブナ林の状況把握と地域への還元と活用の模索、シカの食害からの生態系回復に向けての再生策の立案と実施への多様な主体の参画、市民科学者や植物園と連携した地域絶滅が危惧される芦生産希少植物の域外保全を実施した。続いて、森の生物資源を活用する取り組みとして、トチの実文化の継承、地域資源化、保全の一体的推進、「芦生原生林」イメージの地元産品わさび漬けへの付加価値効果の解明の2つを実施した。さらに里の再生に関して、地域とともに立案・実施した茅葺の里でのアンケート調査と茅葺の里を活かした観光まちづくりへの提案、研究者&地域住民の協働プラットフォームづくりを行った。そして、超学際研究を進めるために対話の場の必要性が強く認識され、研究者と美山町の様々な主体がつながるプラットフォーム「美山×研究つながる集会」を始めた。そして、協働取組全体の評価を振り返るための分析を進め、最終ワークショップを開催した。これらの取り組み、プラットフォーム、評価から、超学際研究が成功するために必要な要素を提案した。